

パストラル・カウンセリングと 専門社会事業

—特にパストラル・カウンセリングの
科学的基礎について—

太 田 義 弘

1 序 言

宗教心理学者であるオルポート G.W. Allport は、心理学の主題の変遷を回顧しながら、過去50年間に宗教と性とは位置を転倒したようであると述べている。それは宗教の心理学的解明について比類のない業績をのこしたジェームズ William James が、かってヴィクトリア時代に人生における性の役割について、その著書で2頁をさくことに躊躇したのであった。ところが今日では、まるで逆に心理学者はフロイド S. Freud やキンゼイ A.C. Kinsey のような率直さをもって人間の性的情熱のことを書くが、宗教的情熱が視野に入ってくれば顔を赤らめて沈黙するとそれをさらに説明している。¹⁾これはここ半世紀における社会の変動とそこに生きる人間の関心の変化とを如実に反映しているのではなからうか。あらゆる分野においてめまぐるしく変化する世界と日本という特殊な社会の趨勢の中で、キリスト教の教会は、今や切実に社会にたいする責任を問われるような局面に迫られている。キリスト教の本質的な目的や機能が稀薄化されて、派生的な機能しか社会にたいして果していないような現実がみられる。それのみか、しばしば人間の無力感や不安感からの逃避、忘我や自己陶醉といった逆効果的な機能をはたしてきたことも事実である。これは少々極端かもしれないが、少くとも宗教的感傷の刺戟によって、何らかの心の安らぎをえるという精神的レクレーションや恵まれた者が施す喜びとしての慈善博愛的な機能へとその重点を移行してきていることは大勢として否めないことであろう。それは

キリスト教自体に問われる責任ではなく、むしろ宗教を正しく受け入れない社会に欠陥があるという方が妥当かもしれない。しかし、一方では敬虔な深い信仰をもちつづけている人々も少なくないが、往々にして閉鎖的な孤独性のからにこもって積極的に大衆社会へのりだすことを忘却しているようである。

ここ10数年間における急激な社会変動は人間に発展と進歩の機会をあたえてきたが、また色々な副産物を社会に醸出させてきた。その中でも特に近年における宗教の役割は社会病理現象あるいは社会病の一つである²⁾といわれるような観を呈してきている。勿論これは最近の新興宗教や迷信をめぐる問題が、その中心点であるが、しかし既成宗教にもその傾向がないということは断言できない。

今日における宗教と社会の問題は、新憲法の精神に基づいている信教の自由をめぐるものであって、新興宗教の発生する現象もここに一因があると考えられ、それが一方では日本人特有のシンクレティズム的宗教観にさらに助長されてきたと考えられるのである。新興宗教にたいする邪教としての非難や排斥は、それが支えられている社会的基盤を考慮するならば、一顧を要する問題であり、庶民の宗教として大衆の中に生きているからである。新興宗教が大衆の欲求にこたえて合理的に成立してきたのに比べて、既成宗教はその現実のあり方が大衆の求めるものとは一致しない。どちらかといえば、新興宗教に現代社会の大衆は魅力をそえられるのである。そのもっとも決定的な要因は布教師が、現実の生活をたたかいぬいて敗れた

大衆と全く同じ経験をもつ典型的な大衆の苦難の理解者であり、ここから教祖や布教師に会うだけで何もう必要がなく、問題を解決されたような体験をさせられるのである。その点既成宗教の聖職者はたとえ苦難の道を歩んできたとしても、ブルジョア的ないしプチ・ブル的であることが多く、大衆にとっては、親近感を抱くことができないのである。新興宗教は信仰に凝ってしまうならば、軽蔑嘲笑されようが、ものの観方を全く変えてしまう機能をもっており、しかもそこから巨大な大衆組織へと入りつつある。それはここに大衆の欲求にこたえるものがあるからである。³⁾ところが一方では社会病理現象ともいふべき「新興宗教が一種の社会保障の組織を有していて、信者の生活に安定感を与えている。」⁴⁾という機能をはたしている。信ずる者にとって新興宗教が現実の生活の唯一の支えになっているということにはかならない。新興宗教がわれわれの考えるような宗教であるかどうかは別問題として、これは随分われわれに考えるべき問題を提起してくれるのである。新興宗教の組織や対象あるいは信者を批判することは生命であるパトスの領域においてのみ可能なのであるから、ロゴスの領域におけるわれわれの批判は本質的なものではないが、新しい社会への宗教のあるべき姿をそれ自らが批判し、示唆してくれるように思われるのである。このような現実の中でカウンセリングと宗教という次元を異にした問題を一つの領域で考えようとすることに無理があるかもしれない。だが、この世界に人間の科学としてのカウンセリングが存在しているということ自体、それを最善に利用する責任をわれわれが負わされているということになる。宗教にたいするカウンセリングの応用は、それが正しく用いられるならば、人間に限りない希望と繁栄とを約束するであろうし、逆用されるならば宗教の存在を無意味にしかねないからである。

さてここで考察しようとしているパストラル・カウンセリング pastoral counseling は、単に心理学的なカウンセリングとしてではなく、専門社会事業の分野から、人間相互関係上の福祉にたいする援助の一型態⁵⁾としてのカウンセリングとい

う意味であることを強調しておかねばならない。それを教会という特殊な社会集団で活用し、人間としての教会員の福祉の増進のために役立てようとする事なのである。教会に何かを求めて、あるいは自らがもっている問題を解決しようと集う人々に、福音を説き、語り聴かせるに先立って、またそれと並行して各々の教会員がもつ問題を解きほぐす過程が必要な場合がある。そしてある整えられた砕かれた魂の状態ですらも信仰の主体性確立のために歩を進められるよう援助をすることがパストラル・カウンセリングの目的なのである。しかし逆境は生命にとって光栄であるといわれるごとく、問題を抱いているからこそ入信の動機となる場合があり、かえって人間的な配慮を加えない方がいいという批判があるかもしれない。しかしそれは問題そのものの内容や程度によって決定されるものであって、信仰にとって本質的なものでなく、対立矛盾する問題ではない。

2 牧 会

パストラル・カウンセリングとはカウンセリングの一般的原理と技術を、教会 pastoral ministry という特殊な場に応用してゆくことである。まずここで教会とは何かという問題について答えるため簡単に説明しておこう。「教会とは、個人……を説教と聖礼典へ、すなわち神の言へと導き、教会の一員とし、そこで彼を養うことを目標とする」⁶⁾、羊の群（聖書の譬より信徒および求道者）を牧する羊飼（神の召命をうけた聖職者としての牧師）の働きのみをさすのである。牧師が、各々個人をよく理解して福音を宣教し、かつ神の言とその教会規律とによって訓練することなのである。それによって教会員が信仰生活を継続し、そこに生起する人生の問題や危機を克服するような信仰を養うように配慮 pastoral care することで、この牧師の役割とそれを遂行するための努力とをさして教会というのである。⁷⁾

プロテスタント教会における教会の発端は、宗教改革としてのカソリック教会にたいする教会改革にはじまる。カソリック教会によると、信徒の懺悔告白は人間の行為にもかかわらず神を喜ばすこ

とであるため、罪が赦されるのであり、司祭は神にかわって罪を赦す権能を信徒にたいしてもっていたから、この権能を乱用することができたわけである。ここに罪の赦し、魂の救いはイエス・キリストの恵みによるのみであるとして、プロテスタント教会における牧会がはじめられたのである。

18世紀の半ばにいたる頃から、牧会は実践神学として牧師の実際的な働きとその内容を問題にして考えられてきたのであるが、19世紀の初期には敬虔主義の多大な影響をうけて、従来のプロテスタント教会の正統派と考えられてきた信仰の形式主義に反動して、人間と人間との相互関係を中心とする牧会が考えられ、牧会神学は実践神学の一部門として成立するようになってきたのである。パストラル・カウンセリングは、このようなところにその起源が求められる。⁸⁾ 牧会の問題は、キリスト教の長い歴史の中でも、特に熟達した牧師の経験にもとづいて、信仰的かつ常識的に実践され、考えられてきた分野である。このことは欧米などにおいても、牧会神学の専門書が、比較的少ないことから充分うかがえるのである。ここに近年、牧会神学の学問的体系化の必然性が生じたのであるが、また一方では、人間についての科学の発達があたえてきた影響も大きいといわねばならない。すなわちわれわれのカウンセリングの立場は、心理学的・社会学的基礎の上に人間を理解してゆこうとしている立場であるが、それは木を見て森を見ずといった比喩がしめすごとく社会と断絶した個人心理学ではなく、個人を社会という人間相互関係との連りにおいて追求し、分析理解しつつ、その個人をさらに心理学的に深く掘り下げてゆこうとしている立場である。このような実にダイナミックな相互関係の中に現実の人間が生きているのである。

したがって牧会は、考察してきたように個々の教会員を説教と聖礼典とを中心として、神の言により、かつ教会規律によって訓練することであるから、その基礎に人間にたいする神学的理解は勿論のこと、心理学的・社会学的理解が必要とされてくるのは、当然であるといわねばならない。こ

のような影響をうけてようやく牧会心理学という専門分野が開拓されつつあるが、残念なことに牧会の社会学的な側面については、まだ全く手がつけられていない。牧会社会学という言葉すらもないが、やがてこの分野の開拓も時間的な問題であろうと思われる。

3 カウンセリング

さてここでカウンセリングとは何かということをも簡単に説明しておかねばならないが、原理や実際、さらにその諸問題については内外の書物に色々紹介されているので、それを参照していただきたい。⁹⁾ カウンセリングという概念が現在のこのような内容をもって理解されだしてきたのは、15年程以前からのことであって、「目的をもった会話」¹⁰⁾とか「専門的な会話」¹¹⁾であるとごく一般的に簡単に説明されていた。しかしそれではその肝心な過程が全くわからないのであるが、その後「カウンセリングとは、ある人の人格の成長と統一とに援助を与える過程である」¹²⁾と説明され、類似した定義がいくつかたてられている。ここで最近の最も普遍的なカウンセリングの概念を説明した定義をあげておこう。すなわち「カウンセリングは、通常二人の人間の対面的関係を中心とする力動的な相互作用の過程であり、この中で一方の人が他方の人の適応問題の解決に対して、主として言語手段によって専門的に助力を与え、その人の人格的成長を促がそうとするものである。」¹³⁾と理解されている。カウンセリングの基本的な手段は面接であって、カウンセリングの技術とは、面接の技術にほかならない。原理を詳細に説明することは限られた紙面で不可能であるがパストラル・カウンセリングの権威者の一人であるヒルトナー S. Hiltner が基本的原理としてあげているものを紹介するにとどめておく。

① カウンセリング過程は、クライアントの状況と、それについてかれのもつ感情とに関心の焦点をあつめる。

② カウンセリングは、クライアントがその状況についてどのように感じているかを、カウンセラーの側から客観的に理解することと、その理解

した現実のコミュニケーションとを通じて進行する。

③ クライエントの葛藤している情緒が、カウンセリングにあらわれてきたときにまずカウンセラーは葛藤の要因と、それらに関連してかれに生じている要因を明確化させるようにクライエントを援助する。

④ カウンセリングの関係（カウンセラーとクライエントとの関係）は、クライエントの側にある種の特別な制限と同様にある種の特別な自由をあたえる。

⑤ カウンセリングの過程は、次のようなものを含まねばならない。すなわち一、二の特定な機会に洞察の強化をさせたり、明確化をあたえたりする援助の機会が含まれねばならない¹⁴⁾ としている。クライエントに主体性がおかれる時間的な制約の中で自由に自己を表現できる面接場面の構成、ラポールの高揚、傾聴、問題の理解、態度や感情の受容とその反映、洞察などの一連のカウンセリング過程における技術を説明している。

カウンセリングは発生的には20世紀初頭、米国の職業指導運動の活発化の中にもとめられる。このとき多くのカウンセラーが、小・中学校に任命されて、ガイダンスの過程にカウンセリングの計画を実施し、その効果をはかったのである。その後、1930年代になって、やっとカウンセリングは教育指導や職業指導の領域から発展的に分化して独立の域にたつたのである。それはガイダンスの過程で、学生達にたいする職業やカリキュラムの選択などに加えて、もっと基本的な人間個人の人格的な問題に触れる必要を認め、ガイダンスに直結している学校の管理や訓育と分離して、パーソナリティの発達のための指導とか、ある問題にたいしてどのように適応してゆくかについての指導という重要な領域が自覚され、それがやがてカウンセリングの実質的な基礎領域となったわけである。

その後の発達と専門化に多大の影響をあたえたのが、第二次世界大戦である。徴兵者の配置決定の主要な手がかりとして、また帰還兵士の社会生活への再復帰のための方法として、その実践的性

格の認識ともなう必要性が強調され、現代化の域にまでいたったのである。

カウンセリングの近代的発達について、直接、間接にロジャーズ C. R. Rogers に負うところが多いのであるが、かれはカウンセリングを狭義に解して精神療法と同じもの、あるいはその一方法であるとの立場から、パーソナリティの構造そのものを基本的に改造し、再構成しようと意図したカウンセリングを考えた。だから問題が、人格的、情緒的なものに集中され、対象者は、主にパーソナリティに障害があって、正常でない状態にあるがゆえに、行動に異常をきたしている人である。「すなわち、その態度や行動を転換させるために援助する必要がある人との一連の直接的な面談」¹⁵⁾ という表現でその立場をしめしている。この立場をとる学者にボーディン E. S. Bordin、スナイダー W. N. Snyder などがあげられる。

これにたいして広義にカウンセリングを理解する立場が、ウィリアムソン E. G. Williamson、ロビンソン F. P. Robinson などによってみられる。この立場は、カウンセリングの目的を適応上の問題の解決を通して、パーソナリティの成長発達をうながそうとするところにおいている。正常な（実はその基準が随分曖昧である）パーソナリティをもった人が対象となり、問題を人格的、教育的、職業的、経済的な側面にあわせて、教育相談 educational counseling とか 職業相談 vocational counseling などのように、情緒的要素が比較的少い、ガイダンスに近いものとして理解している。だから「クライエントが、自己自身に対し、また環境に対してもっと効果的に適応するように助力を与えられる」¹⁶⁾ のである。

またカウンセリングの実践の方法によって、指示的 directive と非指示的 non-directive カウンセリングとに分類されているが、これらについて効果を云々する論争が、10数年前から問題になってきている。これはウィリアムソンの初期の貢献にたいする批判となって生じてきたもので、ロジャーズが、かれの立場を指示的だと批判したことに端を発する。これまでの方法はカウンセラー中心のであり、非民主的であるとのべて自ら非指示

的方法を提唱したのである。しかしこの問題に関して、今だに効果の良否からくる結論はでない。現在は、これらを建設的、発展的に統合しようとしている折衷的立場のカウンセリングが、一般に高く評価されている。

4 パストラル・ カウンセリングの成立

パストラル・カウンセリングの原理や実践が米国の教会において問題にされるようになったのは、約30数年前のことであって、まだまだ学問的に体系化されるまでにはいたっていない。1925年、牧師ボイゼン A. T. Boisen が米国マサチューセッツ州ウースターの国立病院でパストラル・カウンセリングの講習体制をつくり、そこへ数名の神学生を送ったのを発祥とするといわれている。かれ自身精神的疾患で入院した経験をもち、その後ボストンの精神病院で研究をすすめながら、そこにおける患者達の悩みと宗教の回心時における心の悩みとがきわめて類似していることをしたのである。かれのもつ体験からたましいへの配慮の新しい形の必要性を痛感したことが、その出発点となったようである。¹⁷⁾

カウンセリングを教会に応用することは簡単なのであるが、実は非常に困難であった。それは両者の学問的性格の相異性から生ずる問題よりも、むしろ過去における偏見から生ずる危惧が問題にされたからである。すなわち、かつてフロイド S. Freud が、正常に成長した人間には宗教の必要性がなくなるだろうといったことに端を発して、¹⁸⁾ 宗教批判がもちあがったことにある。かれの精神分析理論は、事実信仰者の心的現象を科学的、客観的に分析、説明したのである。そこで宗教が自己の立場の独特な領域を再認識することよりも、人間の科学にたいして、宗教の神聖を冒瀆するにもあまりあるとの感情的反発を先立たせ、深く一線を画する対立を生ずるようになったのである。だからながらく精神医と牧師との間に敵対関係が生じてきたのもそのゆえである。¹⁹⁾ やっと近年になって牧師は、教会において生じる様々な

人間の問題をあつかうのに専門家としての精神医に協力をもとめ、精神医学の成果の独特な貢献を高く評価するようになったし、また精神医も自らの領域にてって、牧師の働きにおしみなく助言をあたえるような関係になってきたのである。²⁰⁾ カウンセリングにおいても同様の問題があったことはいうまでもない。この危惧を避けるために、以前もっぱら牧師がなしてきたカウンセリング（常識的な意味での相談）は牧会神学一本に方向づけられてきたのである。しかし今日自己の独自の領域の認識にしたがって、それは牧会心理学を中心にしたものへと発展してきたのである。²¹⁾ 既成の科学を必要に応じて借用するのではなく、それを応用した独自の科学を作成してきたといえる。だから現代の欧米における牧会神学は、牧会の基礎として信仰の独自性の確立から聖書の人間観を目標とする神学的基礎を堅固にし、さらに一歩前進して心理学的基礎が教会に重要視されるような段階に到達してきている。すなわち個人にたいする福音の宣教という観点から、人間を心理学的に理解しようとすることである。疾病の状態にある場合の心理現象や悔改、新生などについてもそこに見出す神学的内容をもった心理現象に注意を払って人間の行為を理解しようとしているのである。このような動向は、米国においてすら、ごく一部の牧師のあいだにみられるのみであって、まだまだ制度化された基礎の上に立っているわけではない。また教会におけるカウンセリング活動の全体的な性格や内容、原理についても決定的な見解が成立しているわけではなく、数冊の書物が出版されているのみである。²²⁾ しかしカウンセリングの重要性については相当普遍的に認められるようになってきており、神学生のため必修課目にして、ほとんどの神学校で正規のコースにあるいは牧会学 pastoral theology の一部として、カウンセリングの講座が設けられている。わが国においても、ようやくカウンセリングが教会にどのように役立つかということについて関心をしめしてきたようであるが、神学的にも随分問題があり、実際に応用されているような例は、まだ皆無であると思われる。この傾向はほとんどの学

問が、そうであるように一步欧米に先んじられていることから当然考えられることであるかもしれないが、比較的浅い文化的、歴史的背景をもつ米国とは少し事情が異なることを考慮しておかなければならない。だから米国におけるパストラル・カウンセリングの現況に示唆をあたえられるとともにそれをわが国の教会でどのように活用するかということについては、日本的な条件を充分考慮した上でなされねば効果が半減するのみか、かえって教会に逆効果をおよぼすことにもなるであろう。

パストラル・カウンセリングが心理学的基礎のみを重視して、問題に対処するということは、前述のような意味で危険である。日本という長い歴史の中に築かれた社会的背景のもとで教会と教会員の問題が考えられることが前提である。ここで教会についての社会学の基礎の重要性を認識せねばならない。

パストラル・カウンセリングの成立についてはいろいろな問題があるが、理論的にはカウンセリングの原理や実際を教会に応用することで、他の学校カウンセリングや職場カウンセリングと異なるものではない。ただカウンセリングがなされる場によって異なるのであり、そこにひきだされる宗教的な諸資源や次元で、すべての人間の成長や問題が考察されねばならない²³⁾ ところに特殊性がある。そして福音的人間形成をはかるこの過程を援助してゆくことがパストラル・カウンセリングにほかならない。

5 専門社会事業としての

パストラル・カウンセリング

(1) 専門社会事業——専門社会事業がいかなるものであるかについては、竹内愛二著「専門社会事業研究」を参考していただき、そこにおけるカウンセリングの位置付けを明確にすることによって、専門社会事業としてのパストラル・カウンセリングがいかなるものであるかを考察してみよう。

人間のもつ社会生活上の適応の問題にたいする援助型態としてのケースワーク casework, カウンセリング counseling と精神療法 psychotherapy は非常に共通した性格をもっており、

その方法や領域を他のものと区別することは困難であり、各々の独自の特殊性を強調することによってわずかにその区別をなしてきたのである。社会生活において問題をもった個人を援助する場合カウンセリングを通じてなされる場合と、具体的サービスを提供することを通じてなされる場合とが、その実践において考えられる²⁴⁾ そしてクライアントの状態によって、ある場合にはカウンセリングの側面を深く掘り下げた、すなわち精神療法を必要とすることがあるわけである。一般的には、具体的サービスをともなった援助過程がケースワークで、社会生活での適応上の問題解決に援助する過程が、カウンセリングであり、さらにそこにおける個人のパーソナリティそのものの再構成を援助する過程が、精神療法であると理解されている。

カウンセリングは産業界、教育界、社会事業界などいたるところで利用されているが、産業界では究極的にはいい人間関係のもとに企業における生産性向上のため、教育界では学習効果の向上を目標としてなされるのである。ところが社会福祉の分野でそれが用いられる場合には、常に人間の社会生活における福祉 better being というものに第一義的目標がおかれるということである。しかし産業界や教育界においても専門社会事業としてのカウンセリングがなされているところもあるわけであって、その場合職場における人間関係の不調整の問題がモラルやさらには生産性向上にどのように影響するかということよりも、職場をふくめた社会生活の場で、その個人の福祉をどのように援助してゆくかが問題にされているわけである。

このように考えてくるとパストラル・カウンセリングを何故に専門社会事業の側面から考えようとするかが明らかになってくる。よき教会員であることは、また一方ではよき家庭人、社会人であり、よき市民でもある。パストラル・カウンセリングが教会内における教会員のパーソナリティの問題のみにとどまらず、ひいては一般社会における人間の福祉の問題にまで関与してくることが専門社会事業としてのパストラル・カウンセリング

にほかならない。またパストラル・カウンセリングのみならず、具体的なサービスをふくんだ pastoral casework や教会学校、青年会、婦人会などの活動における pastoral group work, さらに地域社会と教会の結びつきとしての community church という考え方から community church organization の成立もこれから問題として考えられるであろう。新興宗教の存在が、社会病理現象だといわれる折に宗教にとって本質的なことではないが、教会が社会にこのような積極的な役割をはたすことは広い意味で社会福祉政策の一つとしての役割をはたしているということにもなるであろう。

(2) 専門家との協力関係の樹立——教会は、本質的に牧師のみが関与する領域であって、協力は要請されるが、他の何人によってもその職責が代行されるものではない。だからカウンセリングを教会に応用する場合、牧師がその専門的な知識や技術を体得していれば別問題だが、大抵の場合専門家との協力が必要となってくる。これは牧師が医者や法律家の援助や協力をもとめるのと同様である。牧師もカウンセラーも一つの専門職業 profession であり、牧師がカウンセリングに精通することは、医者や法律家になるということを要求するのと同様であって至難なことだといわねばならない。しかし実際、このようなことが両立実現したとするならばどうであろうか。この場合次のような二点で弊害や限界が生じてくる。①説教の問題と②教会（説教を除いた）のための諸活動の問題が生じてくる。

第一の点については、牧師であり、かつカウンセラーであるところから、牧師は神の言の仲介者として福音を説かねばならないし、よきカウンセラーであるためには、説論的発言を絶対にさげねばならない。どちらにプライマシーをおくかということは愚問だが、少くともよきカウンセラーであるためには、説教の内容が規制をうけることになる。神の言の仲介者としてよりも、人間の合理的、理性的な思考の代弁者として、あたりさわりのない説教をせざるをえない。第二の点では、問題をもっている教会員については、ある程度効果

的であるが逆に問題をもっていない教会員にとっては、全く逆効果を生ずる。もっとも決定的なこととは、よきカウンセラーであるためには社会生活における個人的な関係をできるだけ避けねばならない²⁵⁾からである。カウンセリングの効果をあげるために、このような技術的配慮を忠実にまもっていれば教会の職責は果されず、教会の手段によっていかなる効果があるといえども、牧師はまず教会そのものに忠実でなければならない。牧師の役割の第一義は preacher 説教者であり、カウンセラーの役割の第一義は listener 傾聴者である。だから必然的にクライアントとの役割期待の関係から生じる相互の行為から牧師に効果的なカウンセリングを期待することは困難であるといわねばならない。

牧師が、カウンセリングを実施する場合、どこまでも神学的教会サービスの一補助手段としての心理学的理解や技術であって、²⁶⁾本質的なカウンセリングの目標を期待することは無理であり、発生的にもパストラル・カウンセリングは、神学的領域内からではなく、心理学的志向とともに並行して発展してきたのである²⁷⁾から、完全に神学に吸収されることは考えられない。牧師がカウンセリングの原理や技術にても、かれによき実践者であることを望めない。むしろよき理解者であればいいということである。牧師が、カウンセラーである場合の利点は、職業倫理の問題が教会員によく認識されているということからラポールを高める条件が、最初からとのえられているということである。その点カウンセリングは young profession であって、まだ人々には充分認識されていないのである。しかしいずれは克服されるものである。カウンセラーはラポールのための技術をもっているから不利点ということにはならないだろう。そして精神医学との関係のように、よき理解をもって専門家との協力のもとに実践を援助することが適切である。どうかすると牧師が教会問題を一人で抱えこんでしまうのであるが、牧師は必要におうじて信者 layman の協力をもとめ、またかれらは教会について牧師にできるかぎりの援助をあたえるべきなのである。²⁸⁾

さてここでカウンセリングの過程においてどのような具体的協力関係が必要とされるものなのか考えてみなければならない。まず最初に教員が、カウンセリングをうけるまでの過程において、カウンセリングをうけること自体に不安や恐怖をもっているものである。このためにパストラル・カウンセリングの過程では、特に予備相談 pre-counseling を重視している。²⁹⁾これは産業における人事相談についてもいえることだが、ある特定の機能集団の中におけるカウンセリングであるから、同じ組織の下でカウンセリングをうけることをだれしもこのまないのである。そのためにカウンセリング前過程ともいうべきものが必要になってくるのである。予備相談は広義にはカウンセリングの過程に包括されるべきものであるが、教会事業の牧師によるイニシヤティブとそれにたいする教会員の役割期待関係、さらに専門家との機能的役割分担という立場から、牧師によって予備相談がなされるのがもっとも妥当だと思われる。すなわち、カウンセリングをうけることの必要性の有無ならびにカウンセリングをうけることへの動機づけ、すなわち不安や恐怖の除去よりも、むしろ勇気づけということが、ここでは重要な意味をもつ、それについて牧師はカウンセラーとクライアントとの仲介となるのである。これはカウンセリングの場面構成ということから考えて、クライアントに主体性が必要とされることから重要なカウンセリングの前段階となる。またこの予備相談の役割を牧師がはたすことによって、教会の目標とするところへ、カウンセラーのよき協力を立て教員を訓練することができるのである。

パストラル・カウンセリングは原理的には counseling within the framework of church というべきものであって、特に牧師 pastor によってなされるから pastoral counseling というのではない。カウンセリング自体は科学的プロフェッションであって、本質的に教会と直接関係をもたないがカウンセラーが教会の意義を理解して教会員の信仰生活（全日常生活）上の諸障害を人間の科学のレベルで援助し、この人間的に整えら

れたる状態、あるいは整えられつつある状態の教員を、さらに牧師が教会の目標にしたがって訓練してゆく、機能的な相互協力関係の過程をパストラル・カウンセリングとすることができる。

(3) パストラル・カウンセリングの役割——パストラル・カウンセリングが、教会において、どのような役割を果すことができるか。教会とカウンセリングの二側面から考察してみよう。

A 教会とカウンセリングの目標 教会は教会形成を目標にし、カウンセリングは人格の成長を目標にしている。これらの目標にたいして、パストラル・カウンセリングが果す役割は、

① 宗教的人格の完成をめざす個人の価値の尊重ということである。だからパストラル・カウンセリングは教会自身の目標と同じものをもっている³⁰⁾といえるのであって、罪の悔い改め、神の救い、宗教的兄弟愛などの神の迫りにたいして、個人の適応と、その個人の価値に応じた宗教的人格の成長を、信仰をもったクライアント中心的な関係で援助してゆこうとすることである。³¹⁾

② は、自主的人間の育成ということである。パストラル・カウンセリングは、内的葛藤を理解する過程を通じて、教員自らが自己を援助するのを、カウンセラーが側面から援助しようとする試みであるから、カウンセリング過程の進行を通じて、自主的に自己の問題解決にたいする責任とその処理をすることを自ら修得するように援助するのである。それは信仰の主体性の確立ということにほかならない。一時的感情あるいは宗教的集団の特異な雰囲気まきこまれてしまって、信仰にたいする自主的精神をもたない大衆心理的ムードは好ましくないから、ここにおけるカウンセリングの役割もまた重要である。

③ は、精神的健康ということである。入信の動機として、精神的に、肉体的に不健康であることが、信仰的にも大きな意味をもっているが、正しい信仰生活は健康な生活にあるといわねばならないし、精神的に健康状態にあるということは、信仰生活に基本的なことである。だが信仰によって精神的平衡状態がコントロールされねばならないにもかかわらず、逆に精神的不均衡が、非信仰的

状態を生ぜしめる原因になっていることが多い。この精神的不健康状態の原因は、主にパストラル・カウンセリングからの直接的対象の一つであり、その援助過程を通じて問題が解決されるのであるから、ここに問題解決への直接的援助としての第一義的役割があるといえる。

B パストラル・カウンセリングの過程がはたす役割。カウンセリングの過程が教会にたいしてはたす役割は、

① パストラル・カウンセリングにおいては、早く深いラポールをつくることが可能である。教会のあらゆる集いや交りを通じて、自由に忌憚なく話しあう雰囲気をつくることが強調されるのであるが、安易に相手を信用してなんでも話すことは通常困難である。たとえ相手が牧師の場合でも説教の種にされたり、批判や説諭をされはしないだろうかという懸念を抱くのである。カウンセリングの面接場面ではこのような懸念を抱くことが、もっとも少くすむからラポールをつくる可能性が大きいといえる。

② 教会員のもつ問題が、具体的表面的なものとともに情緒的要素をもつものとして扱われる。悩みをもった人にたいして、信仰者は、自己の過去の問題経験を類推普遍化して、信仰の励みや、同情や慰めをあたえて問題をのりきるように説くのが常であるが、むしろパストラル・カウンセリングによると問題解決の水準が深く、個別的な生きた情緒的段階で科学的に扱われる特徴がある。

③ カタルシスの機会が多い。専門的技術をもったカウンセラーとの会話であるから、意識的に名誉や肩書きが緩められ、感情の吐露とそれにもなう情緒的緊張の緩和が可能である。

④ 人間関係にいい経験をあたえられる。カウンセリング関係には必ず転移や抵抗があるものだが、受容の人間関係の新しい経験が融和的行動を生じ、よい人間関係をつくる契機となる。幼少時に親から拒否的に叱責されて成長してきた人は、反動形成として攻撃的態度にでたり、自己防御の態度にでたりする。このような人に説諭したりすると否定的転移が生じ、人間関係は排斥的、破壊的なものになってしまう。だがカウンセリングを

通じての感情の表現とそれにたいするカウンセラーの受容的反応に、かつての人間関係で経験したことのない新しいものがあることを経験して、洞察と自己認識を生ずるのである。

⑤ 他人に秘密にしておきたい問題をもっていることがある。信仰者という対社会的な面子を意識するだけでも軽卒な言動はできないのに、恋愛や親子関係などの問題が生じた場合、誰にも話せず自己閉鎖的になってしまう。どうしても専門家の援助が必要である。勿論、秘密の厳守は専門家の倫理である。

⑥ 宗教的人格観の陶冶にたいする経験をえることができる。カウンセリングの自助の援助を通じての自主的精神の陶冶、信仰の主体性確立と個人的人格の尊重という宗教的人格形成のよき経験をえることができる。

⑦ その援助過程は、教会内における問題のみではなく、広く日常生活における問題解決にも適応されるものである。

(4) パストラル・カウンセリングの効果

さて最後に専門社会事業としてのパストラル・カウンセリングが実際どのような治療的效果をはたすことが可能なのであるか、一例としてそのものと密接な関係のある罪障感 *guilt feeling* の問題をとりあげて考察してみよう。

一般に信仰深いといわれる人は、一風変った人という印象をうけることがある。律法を遵守したあのパリサイ人のような超現実的な感じがそれである。しかしそれはイエスによっても否定されてきたように、律法によって、自由を束縛されるような印象をあたえることであってはならない。真に信仰深い人とは律法を現実との調和の中で最大限に生かしてゆくことのできる人である。信仰が現実と釣り合いのとれない場合、たとえば教会が逃避の場であったり、自己顕示の場であったりすることがある。

それは意識されていないことも多いがだれしもこのような自己中心性をもつものであり、ここに罪障感の生じる原因がある。罪障感とは罪 *sin* 意識の心理現象なのであるが、篤信的態度とは罪の自覚、すなわち人間性の現実から正常な罪障感を神

にたいしてもつという態度にはかならない。

罪障感に欠陥にたいする非難の感情として考えられ³²⁾ 恐怖や畏怖と結びついて決断や行動の深底にあって、それを常に規制しているのであるがこれは三つの段階があると考えられている。

(1) 正常な罪障感、(2) 誇張された意識的罪障感、(3) 抑圧された無意識的罪障感³³⁾ とである。これは人間にとって普遍的な現象であると理解されるが、また社会の文化的背景の相違によっても、罪障感のもつ内容は変るといわねばならない。たとえば日本人は罪の意識よりも恥の意識に重きをおいている³⁴⁾ といわれる。だから恥辱感が罪を回避するところから、すなわち罪障感が本質的に罪の自覚から生ずるのではなく、恥意識の派生的存在として自覚されてくるということである。だが正常な罪障感にたいする感覚は、むしろキリスト教にとって必要なことである。罪障感がカウンセリングで問題にされるのは、意識と無意識の二つのレベルでなされる結果としての行為においてである。前者は行為の皮相的な性質をきめるものであり、後者は累積されてきた思考の結果としての行為にあらわれる³⁵⁾ のである。多少にせよ罪障感の強い状態は、一般に個人的不調整状態の一部と考えられる³⁶⁾ から、罪障感のもたらす結果よりも、罪障感をつくりあげてきた恐怖などの原因の追求に目を向けなければならない。

罪障感に罪を告白することによって軽減される³⁷⁾ のであって、告白 confession は罪障感にたいする治療の役割をはたす³⁸⁾ といえる。告白という言葉がもつ一方における科学的な意味はカタルシス catharsis ということであって、³⁹⁾ 司祭と信徒という関係におけるカソリックの懺悔告白には、そのような要素が多分に含まれている。罪障感の解決は赦しであって告白はその手段である。

特にプロテスタント教会では、このような関係での形式的な告白というものはなされませんが、牧会の過程でカウンセリングがもちいられるときに告白にいた関係が展開される。しかし告白は神にたいしてなされるものであって、罪の赦しはキリストによってのみ可能なのであるから、むしろこ

の過程では、カタルシスという意味が一層重要視されるのである。パストラル・カウンセリングは元来この関係から発展してきたのであるが、カウンセラーとクライアントとの関係における告白めいた陳述にも、罪を赦すとか助言をあたえる権能は、信仰的にも技術的にもゆるされるものではない。むしろこの過程で技術が最大限に生かされるようにしなければならない。そこで罪障感にたいするカウンセリングの効果を期待することが可能になってくるのである。

これを専門社会事業の原理によって説明すれば、人間関係が人間の相互行為であることはいうまでもないことだが、この相互行為が主として言語によるものとして展開されるのが、人間関係の特徴である。言語的行為はさらに口頭言語 verbal language、行動言語 behavior language と器官言語 organ language の3種に分類され、人間は行動言語や器官言語を口頭言語に切り替える能力をもっており、主としてこの口頭言語による人間関係の展開過程が専門社会事業なのである。³⁵⁾

罪障感が告白という口頭言語によって表現されるときに罪が赦されたという確信をあたえられるのであるが、罪障感が告白されずに内向うっ積すると、器官言語として身体的な諸障害に表現されたり、あるいは狂信的態度としての霊的サディズムや自己閉鎖的態度としての霊的マゾヒズムともいべき行動言語に表現されたりするのである。パストラル・カウンセリングにおける面接の意義が、この口頭言語による人間関係の展開過程にはかならない。

6 結 語

以上専門社会事業としてのパストラル・カウンセリングの原理とそれをめぐる諸問題について考察したのであるが、まだまだ原理や技術の体系化にまでいたっていないし、その効果すらやっと認められるようになってきたばかりである。牧師とカウンセラーの牧会における役割の機能的分担についても、神学的に随分問題になることだと思われる。それにまたレイマンとしての専門家にその人材が少いこと、さらに教会自体が専門家を獲得

するだけの能力も現実の問題としてもっていない。しかし色々問題はあろうが教区に専任のカウンセラーを配置して、必要に応じて各教会を訪問し、クライアントとの面接をつうじて、牧師の牧会を援助するようにすることが、もっとも可能性のある方法だと思われる。

新しい社会にたいする教会の使命は、あらゆる側面で重要である。教会の本質的な目的を正しく個々人の内に浸透させるために、牧会者としての牧師と人間の科学についての専門家としてのカウンセラーとの有機的な相互協力関係によって、はじめてその目的は効果的にたせられることであろう。

参考文献ならびに引用文献

- 1) G. W. Allport 原谷達夫訳「The Individual and his Religion (個人と宗教)」, 昭和33年, 1頁。
- 2) 水島恵一「社会病」, 昭和31年, 31頁。
- 3) 社会事業学, 昭和33年, 拙稿「自殺と宗教」より。
- 4) 新心理学講座「宗教と信仰の心理学」, 昭和31年, 10頁。
- 5) 竹内愛二「専門社会事業研究」, 昭和34年, 第九章参照。
- 6) E. Thurneysen 加藤常昭訳「Die Lehre von der Seelsorge (教会学)」, 昭和36年, 33頁。
- 7) Paul E. Johnson : Psychology of Pastoral Care, 1954, pp. 19-25.
- 8) William E. Hulme : Counseling and Theology, 1956, pp. 5-10.
- 9) 主な文献をあげておく。
E. G. Williamson : How to Counsel Student, 1939.
E. P. Porter: An Introduction to Therapeutic Counseling, 1950.
F. C. Thorne : Principles of Personality Counseling, 1950.
E. L. Shostorm & L. M. Brammer : The Dynamics of the Counseling Process, 1952.
H. B. & P. N. Pepinsky : Counseling ; theory and practice, 1954.
伊東博「カウンセリング」, 昭和27年。
友田不二男「カウンセリングの技術」, 昭和31年。
鍋島友亀「学生生徒指導のためのカウンセリング」, 昭和31年。
沢田慶輔編「相談心理学」, 昭和32年。
伊東博「カウンセリング入門」, 昭和34年。
K. R. ロジャーズ 友田不二男訳「カウンセリング」, 昭和26年。

- F. P. ロビンソン 伊東博訳「カウンセリングの原理と方法」, 昭和32年。
- 10) W. V. Bingham & B. B. Moore : How to Interview, 1941, p. 1.
 - 11) A. Garrette : Interviewing ; its principles and methods, 1942, p. 8.
 - 12) E. G. Williamson & J. D. Foley : Counseling and Dicipline, 1949, p. 192.
 - 13) 伊東博「カウンセリング入門」, 昭和34年, 72頁。
 - 14) Seward Hiltner: Pastoral Counseling, 1949, pp. 47-54.
 - 15) K. R. ロジャーズ 友田不二男訳「カウンセリング」, 昭和34年。
 - 16) F. P. ロビンソン 伊東博訳「カウンセリングの原理と方法」, 昭和32年。
 - 17) 宗教研究, 昭和36年, 谷口隆之助「いわゆるパストラル・カウンセリングの宗教的基礎について」, 15頁。
 - 18) W. E. Hulme : op. cit., p. 2.
 - 19) R. L. Dicks : Pastoral Work and Personal Counseling, 1957, p. 4.
 - 20) P. E. Johnson : op. cit., p. 85.
 - 21) W. E. Hulme : op. cit., pp. 1-2.
 - 22) 前掲書の他に
S. Bonnell : Psychology for Pastor and People, 1948.
H. Guntrip : Psychology for Ministers and Social Workers, 1948.
F. R. Knubel : Pastoral Counseling, 1950.
J. R. Spann : Pastoral Care, 1951.
C. A. Wise : Pastoral Counseling, 1951.
S. Hiltner : The Counselor in Counseling, 1952.
W. E. Hulme : How to Start Counseling ; building the counseling program in the local church, 1955.
 - 23) S. Hiltner: The Counselor in Counseling, 1952, p. 11.
 - 24) H. H. Aptekar : The Dynamics of Casework and Counseling, 1955, p. 2.
 - 25) 沢田慶輔編「相談心理学」, 昭和32年, 195頁。
 - 26) P. E. Johnson : op. cit., pp. 40-1.
 - 27) W. E. Hulme : op. cit., p. 6.
 - 28) R. L. Dicks : op. cit., p. 174.
 - 29) S. Hiltner : op. cit., pp. 128-148.
P. E. Johnson : op. cit., p. 80.
 - 30) S. Hiltner : op. cit., p. 19.
 - 31) Ibid., p. 19.
 - 32) P. E. Johnson : op. cit., p. 110.
 - 33) Leslie D. Weatherhead : Psychology, Religion and Healing, 1955, p. 332.
 - 34) Ruth Benedict : The Chrysanthemum and Sword, 1949, p. 100.
 - 35) R. L. Dicks: op. cit., p. 22.
 - 36) Charles A. Curan : Counseling in Catho-

- lic Life and Education, 1957, p. 176.
- 37) L. D. Weatherhead : op. cit., p. 387.
- 38) W. E. Hulme : op. cit., p. 39.
- 39) Ruth Benedict: op. cit., p. 102.
- 40) 社会福祉学, 昭和36年, 竹内愛二「ケースワークの社会的本質」, 11-13頁。